



Title	《係り結び》と《推量の助動詞》：中古語における、 文表現と助動詞層との交渉
Author(s)	高山, 善行
Citation	語文. 1988, 51, p. 35-51
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68786">https://hdl.handle.net/11094/68786</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 《係り結び》と《推量の助動詞》

—中古語における、文表現と助動詞層との交渉—

高山善行

### はじめ

中古語助動詞の意味研究は、個別論にかたよがり、組織的に論じられてはこなかったように思われる。その主たる要因は、おおかたにおいて、助動詞の意味が文から切り離されたかたちで論じられてきた、という点にきざりであろう。このような反省に立って、助動詞の意味組織をあきらかにしていこうとするとき、文の意味的階層のなかで助動詞層がどのような位置を占めるのか、さまざまな文表現において助動詞層の意味がどのようにかわってくるのか、といった視点が要請される。今回はその後者の要請を承け、中古語《概言のモード》<sup>(1)</sup>形式として、いわゆる《推量の助動詞》をとりあげる。そして、それらの担っている意味と文表現のありかたを定める《係り結び》との交渉について考究する。

### 一、研究のながれと私の立場

一般に、助動詞層が《係り結び》との関係において論じられる場合、係助詞の《表現性》の差異をもとめる上での《指標》としての

意義を担ってきたといっている。たとえば、複数個の係助詞をとりあげ(フとコソ、ヤとカのごとき)どのような助動詞を結びにとる傾向があるかに注目して係助詞の差異をとらえようとする論がある。このような視点が《係り結び》を理解していく上での基礎論としての意義をもつことはまぎれもない事実だが、《係り結び》という文の《意味—統語論的問題》が、《係助詞》の表現性(という曖昧な概念)の差異として解消されてしまうのは望ましくないであろう。と同時に、文の《意味—統語論的問題》として《係り結び》という現象を見ていこうとするとき、組織性、精密性を欠く助動詞の意味研究のありかたが、障害になっていることもまた事実なのである。これは《推量の助動詞》に限ったことではないが、助動詞の意味は組織的に論じられることがほとんどない。一步譲って、個別論の蓄積があると認めたとしても、意味規定のなされかたは、文脈から帰納されるはなはだ直観的なものであって、分析の客観性を欠いている。その背後には、《一形式に対して一つの本質的な意味を考える》という素朴な《本義指向》が作用していると思われるが、結果として、ことばの問題から離れた抽象論に終わることが多いのはお

おかたの認めるところであろう。すべて形式的に割り切れるとは思っていないが、ことばに即して形式的におさえられる段階まではしっかり押さえておく必要がある。

では、形式的な方向から《推量の助動詞》の意味を統一的・組織的に押さえていこうとするとき、どのような観点が有効であろうか。私は、次の三点に重きを置いている。すなわち、

①相互承接の順序<sup>3)</sup>

②従属節との関係<sup>4)</sup>

③《係り結び》との関係<sup>5)</sup>

である。今回《係り結び》をとりあげるのは、このような理解の上で立つてのものである。従来の視点とは正反対に、《係り結び》との関係をとおして、助動詞の意味を見ていこうとする。《係り結び》が文表現のありかたを定めるものであるということを確認した上で、「《推量の助動詞》の意味が文表現といかようにかかわるか」を問うことが本稿のねらいであり、その問いかけをとおして、「推量の助動詞」の意味組織を整理していく見通しを立てようと試みる。また、このような視点は《係り結び》研究の側からも要請されるものであろう。

二、対象と資料

二・一 とりあげる《推量の助動詞》の範囲

とりあげる形式の選択は、deductive にならざるをえないが、さしあたり、中古語において一般に《推量の助動詞》として認められている形式をひろくとりあげることとする。具体的には次にあげるものである。

ベシ、マジ、メリ、終止ナリ、ム、ラム、ケム、マシ、ジ

ラシは、上代語と認定し、考究の対象からは除外しておく。なお、今回あつかうのは、前記の諸形式が、epistemic<sup>6)</sup>な意味で用いられている場合であり、deontic<sup>7)</sup>な意味（たとえば、ベシの《義務》(obligation)、ムの《意志》(volition)など)、theoretical<sup>8)</sup>な意味（たとえば、メリ、ムなどについて言われる《婉曲》。ただし、その定義についてはあきらかにされていない）については、考察の対象としない。

二・二 とりあげる《係助詞》の範囲

《係助詞》の範囲の認定は、結局、《係り結び》の定義の仕方によるが、その consensus<sup>9)</sup> がいまだ得られていない現状である。そこで、一般に《係助詞》と認められているであろうと判断し、

ゾ、ナム、コソ、ヤ、カ

をとりあげることにする。また、説明の便宜上、これらを、

確定系—ゾ、ナム、コソ

不定系—ヤ、カ

のように二つに分けておく。このように、まずは、最狭義《係り結び》に限って、観察していこうとするのである。ハ、モ、徒などの《係り結び》については、一応は議論の中心から離しておく。

二・三 とりあつかう資料の範囲

資料としては、最狭義《係り結び》（以下、本稿では、単に《係り結び》と称す）のはたらきが活発であったと見られる平安時代中

期以前の散文文学作品をあつかう。具体的には、『源氏物語』（青表紙本系大島本）『枕草子』（三巻本）を中心的な資料として用いることにする。大量のデータが得られることも魅力だが、何より、先に示した《係助詞》、《推量の助動詞》を統一的にあつかうことをねらったためである。訓点資料は資料的に価値が高いが、残念ながら係助詞ナム、助動詞メリ、終止ナリが出てきにくい。また、和歌資料も、係助詞ナム、助動詞マジの例がきわめて少ないという憾みがある。したがって、これらについては中心的にはあつかわない。

### 三、現象の整理

まず、全体像をつかんでおくことを目指し、用例を挙げることから始めたい。その後で、いささか考証的になるが、従来、例外として切り捨てられていた例についても目を配っておきたい。全体を見渡したと言えるために、大まかな量的傾向差よりもこまやかな質的差異を大切にしたいからである。

#### 三・一 確定系—ソ、コソ、ナムの結び

最初に、形式的な整理をしておく。確定系の係助詞の結びに関する《推量の助動詞》の実態は表1にまとめたとおりである。

〔○は用例数多、△は用例数稀少、×は用例が確認できないことを示す〕

#### §ソの結び

〔ゾーベキ〕

(1) 〳、わろびたることも出でくるわざなめれば、とりどりにこ  
とわりて、中の品にぞおくべき。(源氏、帚木)

〔ゾーメル〕

(2) また、かたみにうちて、をとこさへぞうつめる。(枕、三段)

表1 確定系の結び

	ソ	コソ	ナム
ベシ	○	○	○
メリ	×	○	○
ナリ	○	○	△
ナム	○	○	×
ラム	○	○	×
ケム	○	○	×
マジ	×	○	×
終止			

〔ゾーラム〕

(5) 宮は内裏にまゐらせ給ひぬるも知らず、女房の従者どもは、二  
条の宮にぞおはしますらんとて。(枕、二七八段)

〔ゾーケム〕

(6) 内裏には御物の怪のまぎれにて、とみに気色なうおはしましけ  
るやうにぞ羨しけむかし。(源氏、若紫)

〔ゾーマジ〕

(7) 「たしかにその車をぞ見まし。」(源氏、夕顔)

#### §コソの結び

〔コソーベケレ〕

(8) よそふる心ありて、それをしもこそ、あはれと思ふべけれ。

〔コソーマジケレ〕

(枕、六七段)

〔ゾー終止ナル〕

(8) 里にまでたるに、殿上人などの来るをも、やすからずぞ人々言ひなすなる。(枕、八四段)

〔ゾーム〕

(4) 「〳 戯れにても、もののはじめにこの御ことよ。宮聞こしめしければ、さぶらふ人々のおろかなるにぞさいなまむ。」(源氏、若紫)

(9)奥のかたより見いだされたらんうしろこそ、外にさる人やとおほゆまじけれ。  
〔「コソ—メレ」〕  
(枕、八三段)

(10)をのこは、また、隨身こそあめれ。  
〔「コソ—終止ナレ」〕  
(枕、四八段)

(11)いとわろき名の、末の世まであらんこそ、くちをしかなれ。  
(枕、八二段)

〔「コソ—メ」〕

(12)「〜」さし退きて、花の陰に立ち隠れてこそ、強き言は出で来ぬ」  
(源氏、少女)

〔「コソ—ラメ」〕

胸かしこき陰とささげたる扇をさへとり給へるに、ふりかくべき髪のおほえさへあやしからんと思ふに、すべて、さるけしきもこそは見ゆるぬ。  
(枕、一八四段)

〔「コソ—ケメ」〕

(14)「〜」宮人をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、つらしと思ひおきたまふ事こそはありけぬ」  
(源氏、少女)

〔「コソ—マシカ」〕

(15)「〜」その聞きつらん所にて、きとこそはよまましか」  
(枕、九九段)

### § ナムの結び

〔「ナム—ベキ」〕

(16)「〜」齢などこれよりまさる人、腰たへぬまで屈まり歩く例、昔も今もはべめれど、あやしくおれおれしき本性に添ふものうさになむはべるべき」  
(源氏、行幸)

〔「ナム—マジキ」〕

(17)つねに言ふことは、「おのれを思さむ人は、歌をなんよみて得さすまじき。〜」  
(枕、八五段)

〔「ナム—メレ」〕

(18)右近の内侍のまゐりたるに、「かかる者をなん語らひつけておきためる。すかして、つねに来ること」とて、  
(枕、八七段)

〔「ナム—終止ナル」〕

(19)「この十五日になん、月の都より、かぐや姫の迎(へ)にまうで来る」  
(竹取物語)

表1から、《推量の助動詞》は確定系の《係り結び》に関して、五つのタイプに分かたれるであろう。

A① ゴ、ゴソ、ナムの結びになる—ベシ、メリ、終止ナリ

A② ゴ、ゴソの結びになるが、ナムの結びにはならない—ラム、ケム、マシ

A③ ゴ、ゴソの結びになるが、ナムの結びにはきわめてなりにくい—ム

A④ コソ、ナムの結びになるが、ゾの結びにならない—マジ

A⑤ ゴ、ゴソ、ナムの結びにならない—ジ

「不確かな意味をあらわす助動詞群がナムの結びになりにくい」とは、はやくに、宮坂和江(1963)の指摘があるが、その中でも例外があった。それが、ムである。そこで、この五タイプのうち、A④タイプのムについて、いささか立ち入ってみよう。私の探しえた全用例をここにあげておく。

〔「ナム—ムの例」〕

伽大将、「それをなむとり申さむ」と思ひはべりつれど、明らか

ならぬ心のままにおよすけてやは、と思ひたまふる。

(源氏、若菜下)

例(玉鬘)「まめやかなる御心ならば、このほどを思ししづめて、慰めきこえんさまをも見たまひてなん、世の聞こえもなだらかならむ」など申したまふも

(源氏、竹河)

例「女御は、いさやかなる事の違ひ目ありてよろしからず、思ひきこえたまはむに、ひがみたるやうになん、世の聞き耳もはべらん」など、二ところして申したまへば

(源氏、竹河)

例「今日、殿おはしますべきやうになむ聞く。こたみさへおりずは、いとつたましきさまになむ、世人も思はむ、またはた、よものにしたまはじ。」

(蜻蛉、中)

さて、これらの例を吟味してみよう。例の例は、夕霧が釈明している場面であつて、「それを言おう」と思っていたけれど、「と」いう発言をしているのである。したがって、この場合のムは、《意志》(volition)をあらわしていると思つてよい。例の例は、玉鬘が雲居雁に世間体を気にしながら忠告している場面である。よつて、このムも積極的に《推量》をあらわしているわけではない。例も同様であつて、いずれも、女房が世間体を気にして(あるいは、世間体を口実にして)忠告をしている場面であり、そのときのムは、やはり《推量》をあらわしているとは認めがたいものである。また、例以下は、「世の聞こえ」「世の聞き耳」「世人も思はむ」という類型的な表現が見られることも注意される。

いずれにせよ、ナムの結びと見られるムは積極的に《推量》をあらわしていない。はじめに述べておいたように、今回は epistemic な意味だけを議論の対象としているから、形式上はナムの結びとな

つていたムも、先の A②タイプにくくられてよいことになる。

〔修正タイプ〕(epistemic な意味に限定した場合)

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| A'① | ゾ、コソ、ナムの結びになるーベシ、メリ、終止ナリ           |
| A'② | ゾ、コソの結びになるが、ナムの結びにはならないーム、ラム、ケム、マン |
| A'③ | コソ、ナムの結びになるが、ゾの結びにならないーマジ          |
| A'④ | ゾ、コソ、ナムの結びにならないージ                  |

このように、確定系の《係り結び》については、結局、四タイプ(A'①~A'④)に分かれることになった。ただし、この《タイプ分け》は助動詞の分類を意図するものではない。むしろ、この四タイプのありかたが何をあらわしているか、各タイプが文表現といかようにかかわるか、が問われるべきである。が、ここでは一旦はその議論を留保しておきたい。不定系《係り結び》の実態を示した後で、相対化して考えようと思うからである。

### 三・二 不定系ーヤ、カの結びー

不定系《係り結び》に関する《推量の助動詞》の実態は、表2に示すとおりである。まずは、用例を挙げておく。

#### 〔用例〕

#### §ヤの結び

##### 〔ヤーベキ〕

例世の中や、ただかくこそとりどりに苦しかるべき。

(源氏、帚木)

##### 〔ヤム〕

例「今はと絶えなく見たてまつるべければ、厭はしうさへや



「ド」形式(ダロウ)が疑問化可能で、《疑似ムード》形式(ヨウダ、ラシイ、カモシレナイなど、テンスの分化するもの)が疑問化不可能であるという事実と対応する、ということについて述べた。旧稿では、形式的整理に重点を置いたため、文表現と助動詞の意味とのかわりについては立ち入っていないが、今回はそこに踏み込んだりみよようと思う。その切り口として、従来、とりあげられていなかったB②タイプについて検討を加えてみる。具体的には、ヤーマル、(不定詞)カームル、ヤーマル終止ナル、(不定詞)カームル終止ナルの全用例について検討していくことになる。

〔ヤーマル〕

御弁「〱院の御ありさまに並ぶべきおほえ具したるやはおはすめる。」

(源氏、若菜上)

この例は、「院(源氏)の御有様に太刀打ちできるだけの信望をそなえていらっしゃる方がおいでだろうか。(いはしない)」という《反語表現》になっている。

御昔物語りにも、心もてやはとある事もかかるともあめる。

(源氏、繪角)

「昔物語でも、姫君の考えだけでとかくの事(殿方の侵入)が起るだろうか。(起こりはしない。みんな女房の橋渡しによるのだ)」の意。やはり、《反語表現》である。(しかも両者ともヤーマルとなっていることに注意されたい。)

〔(不定詞)カームル〕

御し、思しかけざりし事なれば、尽きせずいみじうなむ。なのためにかたはなるをだに、人の親はいかが思ふめる。ましてことわりなり。

(源氏、葵)

葵の上が急死したあと、母大宮が嘆き悲しむ場面である。この例については、すでに、松尾捨治郎(1906)に指摘がある。

「〱めりは疑問体に用いられないのが原則である〱中略〱其此の原則は、早くから宣長や義門によって認められ、玉緒も玉緒線分も、共に係結用例中の何〱めるの条の下は、空欄にしてある。けれども、何事にも若干の例外のあるのが言語現象の常である」

松尾氏は、この例外について、

「不定詞は『思ふ』に係るのであって、メリには係らない」という説明を試みるが、

「連体形めるで結んでるのは何故か。係結の大法に反しはせぬか。」

と疑っておられる。たしかに、形態変化をおこしている以上、《係り》の作用はメリまでおよんでいると見るのが自然であるから、「『思ふ』に係る」という説明は成り立たないであろう。依然として、「何〱める」がなぜ起こりえたのかという疑問は残されたままなのである。

この疑問を解く鍵は、この例が、外形的には《疑問》の形をとりながらも、その内実は《反語》をあらわしていたところに着目して思われる。先の、御昔が《反語》をあらわしていたことも、注意される。

次に終止ナリの例の検討に入りたいと思う。

御「まろはいかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあなる。」

(源氏、浮舟)

御「さて、いかがさだめらるなる。親王こそまっはし得たまはむ。」

く」などのたまひては、く

(源氏、常夏)

例は、浮舟が自らの身の上を嘆く場面である。「私はどうかして死んでしまいたい。世間並にも生きていけないさけない身の上だったのだ。こんなつらい目に会う例は下々の者の中にだつてたくさんあろうか。(ない)」という意。やはり、《反語》をあらわしていると思われるのである。

例の例は、内大臣が玉鬘の縁組について予想をめぐらせる場面である。「源氏は玉鬘の縁組について、どう決着をつけるおつもりか。(トイウト、ワカリキッタコトサ) 兵部卿宮こそが玉鬘を獲得なさるのであろう。」という意。この例も、自問自答のかたちをとっており、聞き手に対する、純粹な《質問》をあらわしているとは認めがたい。むしろ、《反語》をあらわしているといつていい。

以上、文法原則(量的に規定された)に照らせば、例外として切り捨てられてしまう例について検討してきたが、その例外の中にも一つの共通点を見いだすことができた。つまり、いずれも《反語表現》をとることである。従来、メリ、終止ナリが《疑問表現》をとらないという指摘はなされていたが、その裏、つまり《反語表現》には許されるということについてとりあげられることはなかった。

では、なぜ、《反語》をあらわす場合に限って、メリ、終止ナリがヤ、(不定詞)カの結びになりえたのであろうか。これを考える上では、メリ、終止ナリと同様に、《推定》をあらわすと言われているベシのありかたが示唆的であろう。先の表2によると、ベシは自由にヤ、カの結びになりえていた。しかし、表2の意図はあくまでも形式的整理であつて、ここでは文の意味に立ち

入って見ていかなければならない。実は、「ヤーベキ」、「カーベキ」の文は《反語》をあらわすことが多いのである。

(40) (源氏) 「など頼もしげなくやはあるべき」 (源氏、胡蝶)

(41) (源氏) 「何わざわざしてかは暮らすべき」 (源氏、若菜上)

ベシが純粹に《疑問》をあらわしていると思られる例がないわけではないから、メリ、終止ナリと同一にはあつかえないが、《反語》の多さは注目に値する。という点を、ひとまず確認しておき、《反語表現》と《推量の助動詞》とのかわりに関しては、次節で述べることにしよう。

#### 四、文表現との交渉

確定系、不定

系《係り結び》

の全体像をまとめると、表3のようになる。この表では、《推量の助動詞》と意味的に連続するであろう、いわゆる《断定の助動詞》のナリ二種(体言ナリと連体ナリ)も

表3 確定系と不定系の結び

	《確定系》			《不定系》 (不定詞)カ		
	ゾ	コソ	ナム	ヤ	△	○
体言ナリ	○	○	○	×	×	○
連体ナリ	×	×	×	×	×	○
ベシ	○	○	○	○	○	○
メリ	○	○	○	△	△	○
終止ナリ	○	○	○	△	△	○
ナム	○	○	×	○	○	○
ラム	○	○	×	○	○	○
ケム	○	○	×	○	○	○
マシ	○	○	×	○	○	○
ジ	×	×	×	×	×	×

あわせて挙げておく。(ただし、「ナムーム」は先述の理由から、  
×に格下げしてある。)

表3においては、次の点が特徴的であろう。

α ゾ、コソ、ヤ、カは否定系(マジ、ジ)を除いたすべての  
《推量の助動詞》を結びにとるが、ナムは、ム、ラム、ケム、  
マシを結びにとらない。

β ヤ、カの《係り結び》は、メリ、終止ナリ、ベシ、マジ(カ  
のみ)については、《反語表現》として実現することが多い。

γ 連体ナリとジは、《係り結び》の外にある。

本節では、この三点について順次、検討していき、《推量の助動  
詞》が《係り結び》とどのように交渉するか、換言すれば、文表現  
とどのように交渉するか、という問題について考えたい。

#### 四・一 《断定文》と《推量文》

まず第一の問題について、《ナム係り結び》との関係の特異性と  
いった視点から述べてみたい。《ナム係り結び》の性質については、  
いろいろな立場から指摘がなされてきた。

「言ふべき事をおし出してたしかにことわる」富士谷成章(1952)

「その事柄が、その状態でそこにある旨をしかじか見聞するとい  
ふふうに強調しつ語っていく」 宮坂和江(1952)

「本来、聞き手への確かめを意図して用いられる」

阪倉篤義(1952)

「『卓立』の上に『聞き手への強い呼び掛け』という要素を合わ  
せ持ったものである」

近藤泰弘(1956)

「承ける語を確かなものと認めて相手に向かって提示する」

大野 晋(1984)

「なむ」は、確定的なモノ・コトをとりたて、それを聞き手に対  
して丁寧に、穏やかにもちかける機能を有する」森野崇(1986)

ナムの文法的機能として、共通して指摘されているのは、

(甲) 《確定的に述べる》

(乙) 《聞き手への呼び掛け、持ちかけ》  
という二点であろうが、今回の議論で、関係が深いのは(甲)の機能  
である。

《係り結び》側から見れば、この(甲)の機能を認める一つの根拠  
は、ム、ラム、ケム、マシといった《不確かな》意味をあらわす(と  
見られる)助動詞を結びにとらない、という事実であったわけであ  
る。しかし、この事実を文の意味的階層にひきつけて言えば、ナム  
は、いわゆる狭義《推定》と狭義《推量》とを画定していると言え  
るであろう。それは、メリ、終止ナリ、あるいはその《伝聞性》を  
介してそれらと連続するケリといった、内にアリを含む形式の意味  
レベルと、ム、ラム、ケム、マシといった内にムを含む形式の意味  
レベルの断絶を意味しているのである。蓋し、その断絶は、平叙  
文という閉じた枠、その限りにおいてのものであり、それを文表現  
の類型といった方向に開けば、《断定文》と《推量文》の異質性、  
さらに言えば、判断の異質性を意味していよう。尾上圭介(1987)  
では、現代語の文類型を見るうえで、《平叙文》とは別に《推量文》  
を特立しているが、この区別は、文法史的にも根拠を持つものであ  
ると思われる。ただし、その区別の意識は古代語と現代語とはお  
そらく違うのであって、《係り結び》が背後化し、格関係が卓越し  
てきた現代語においては、判断の異質性よりも、むしろ事態成立の

《確かさ—不確かさ》といった蓋然性の差異が強く意識されるようである。一方、古代語では、判断の質的差異そのものが《係り結び》<sup>(20)</sup>によって、厳密に区別されていたと言えるのではないか。

もうひとつの機能、すなわち(乙)の機能については、《助動詞層》の外の議論となるため今回は、立ち入らない。

#### 四・二 《反語表現》と《推量の助動詞》

第二の問題として、前節で留保しておいた、《反語表現》と《推量の助動詞》との関係について論じてみたい。

《反語表現》一般の理解については、次のような記述が見られる。「いわゆる反語というのは、話し手が、内心に一つの事実に対する肯定または否定の確信を持ちながら、しかも表面は一応、疑問の形をもつて、敢えて相手に問いかける形式をとり、それに対して当然発せられるべき相手の答えを予想することによって、内心の肯定または否定を一層強調して表現するものであって、〜」

阪倉篤義 (1957)

また、助動詞との関係については、

「反語表現の場合には、多く『む・まし・べし・じ』等の推量の助動詞または否定の助動詞を伴って、断定的な、端的な問いかたを避けるところに、(問いと)の差異を認めることができるのである。」

という記述がある。

( ) 内、高山 同 (1957)

前者、《反語表現》一般に対する阪倉氏の記述は明晰で、妥当であろう。だが、後者、《推量の助動詞》との関係についての記述は、あくまでも《反語表現》側からのものであって、助動詞側に立つ本稿においては、次の二点が疑われる。

第一に、《反語表現》が強調を意図しているものであるにもかかわらず、わざわざ助動詞を用いて断定的、端的な言い方を避けようとする必然性についての疑いであり、第二には、婉曲用法が指摘されるムはともかくとして、マシ、ベシ、ジなどが断定的、端的な言い方を避ける機能を果たしえるのか、という疑いである。(特にベシの場合)《反語表現》の側からは、先の「断定的な、端的な問いかたを避ける」という理解が成り立つとしても、助動詞の意味の問題としては、なお検討の余地が残されているように思う。

もう少し、《反語表現》についての記述を見よう。宮地裕 (1976) では、

「(反語表現は) 問いかけと断定とのあいだのひるがえりを、うちに、寵めている。」

と述べており、山口堯二 (1983) では、

「確認(要求)志向は、より確かな判断の確言・主張志向に転じていくと見てよい。そういう確言・主張志向をあらわに担って成立するのが、もつとも反語らしい反語の表現といってよいだろう。」と述べている。このように、《反語表現》の内実は《断定すること》にあると言える。よって、その表現における助動詞の意味も文の意味としての《断定》の手の中にあると言つてよからう。ここに、メリ、終止ナリが反語においてのみ、ヤ、カの結びとなりえた根拠がある。ベシの場合もこれに準じて理解されてよい。結局、松尾捨治郎氏の理解は外形にひきずられたもので、その限りにおいては、先の例外は説明できないのであった。

前に、《ナム係り結び》との関係からメリ、終止ナリがム、ラム、ケム、マシなどと一線を画し、《断定文》のなかにあることを述べ

た。ここでも、それを思い出すべきであらう。ところが、現代語に  
おいては《疑似ムード》形式(ラシイ、ヨウダなど)は、《疑問》  
は勿論のこと、《反語》さえもあらわしえない。もはや、《疑問》の  
形にさえなることができないのである。中古語の用例の中で、メリ、  
終止ナリ、ベシが《反語表現》として用いられるとき、現代語訳の  
上では、《真のムード》形式であるダロウをあてざるをえないのは  
仕方のないことであつた。一方、theoretical な説明を意図する立場  
においては、《婉曲》という概念を持ち込む操作によつて、この矛  
盾を解消してきたのであつた。

#### 四・三 《係り結び》の外

第三の問題として、《係り結び》にかかわらない連体ナリとジに  
ついて検討を加え、その内実について考えてみたい。

#### 四・三・一 連体ナリ

連体ナリが《係り結び》にかかわらないことについては、終止ナ  
リと区別する上で注意されていた。だが、一步踏み込んで、どのよ  
うな事情で《係り結び》にかかわらないのか、といった点について  
は説明されていないようである。連体ナリと終止ナリについては、  
かつて、《伝聞・推定》をあらわすナリを認めるか否か、といった  
点から論争がなされ、今では《伝聞・推定》説がほぼ定着したかに  
見えるが、問題がないわけではない。《係り結び》との関係もその  
一つであらう。《推量の助動詞》に属さない連体ナリをここで敢え  
てとりあつかうのも、終止ナリとの比較を意図するからである。

助動詞の論争ではありがちなことだが、かつてのナリ論争でも、  
やはり、解釈文法の視点からの議論が多かつたように思う。その中  
にあつて、構文的観点から連体ナリと終止ナリの区別を説く、北原

保雄(1965)(1967)は注目される。特に、連体ナリ特有の構文と  
して、《ノーナリ構文》が指摘されており、重要である。その実例  
を示しておこう。

④3 先立たぬ梅の八千度悲しきは流るる水のかへりこぬなり  
(古今、哀傷、八三七)

④3 吹く風の色のちぐさに見えつるは

秋の木の葉の散ればなりけり (古今、秋下、二九〇)

④4 蛙の飛び入りて焼くるなりけり

(枕、一八二段)

ケリを伴つて、いわゆる《ナリケリ構文》をとることも多いが、い  
ずれにせよ、このような構文は連体ナリだけが持つものであつて、  
終止ナリにはないのである。この構文の特徴は、助詞ノまたは助詞  
ガによつて主格表示がなされることで、その事実からナリは直上の  
語のみを承けるのではなく、連体句を承けていたことが知られるこ  
とになつた。連体ナリが《係り結び》とかかわらないということ  
は、当然、連体句フレームから係助詞が排除されることを意味する。で  
は、この連体句は意味的にどのような性質を持つものなのだろうか。  
ここで、主格がノあるいはガで示され、連体形終止となる構文を  
考えよう。たとえば、「うぐひすの鳴く」「花の美しき」。これらは、  
《詠嘆》をあらわすと言われ、喚び性の文であるという把握がなさ  
れてきた。<sup>25)</sup> 発話者が主観の色をつけず、《事態》そのものを投げ出  
そうという表現意図が働いているわけである。このような文は、現  
代語の「花が咲いている」「空が青い」といった現象文に相当する  
であらう。<sup>26)</sup> とすると、《ノーナリ構文》では、この文が句の資格で  
組み込まれていると言えよう。

一方、終止ナリはどのような句を承けているのであろうか。主格

がゼロで末尾が終止形の句。それは、素材を示しているにすぎないより述体的な句であって、他の終止形接統の助動詞群(ベシなど)が承けている句と同様であろう。そこには、積極的な《事態描写》という表現意図はないので、係助詞が入り、その結果、主観の色が加わってもなんら問題はないのである。という意味で、先の連体句よりも述体的であると言えるのである。

(29) このように、連体ナリと終止ナリとは、承ける句の質が全く違う。したがって、両者を《断定・詠嘆》といった意味で一元的にくることは、まず、無理であろう。同じナリという形態でも句の違いによって意味が分化しているわけで、連体ナリはノダ、終止ナリはラシイ、ヨウダに相当するのである。そして、前者の持つ《詠嘆性》は本来的には、ナリ自体からではなく、連体句が帯びている《喚体性》から生まれてきたものであろう。

#### 四・三・二・ジ

ジは、中古においては連体形、已然形の存在自体があやしい。中世に下れば、已然形認定の根拠とされる、

（新統古今和歌集、春下）  
 八人などは訪はて過ぐらむ、風にこそ知られじと思ふ宿の桜を

（宇治拾遺物語）  
 四座をこそ据ゑじと思ひし四つの緒

のような例があるが、《係り結び》そのものが崩壊に向かっている時期であり、また、文語めかした用法かもしれない。《係り結び》の確例とは認定できない。とにかく、構文的環境が問題となった連体ナリと違い、文の意味的階層において、ジはもはや終助詞的段階にあるとさえ言えるであろう。

ただし、《係り結び》の範囲を広げて、ハ、モについて見れば、

ジは、「花ゆ咲かじ」のような例よりも、「花は咲かじ」「花も咲かじ」のように結ぶ例が多いことに気づく。係助詞の《係り》のスコープの問題として、あるいは、モと《否定》との関係のありかたの問題としても議論が成り立ちうるところだが、今回あつかう範囲を越えるものである。すべて、今後の検討を俟たねばならない。

#### 五、まとめ

#### 五・一 《推量の助動詞》の区分

表4 《係り結び》との関係による《推量の助動詞》の区分  
 (連体ナリを含む)

	関係のありかた	肯定系	否定系
《係り結び》の内	N①ゾ、ナム、コソヤ、カの結び	ベシ	
	N②ゾ、ナム、コソ(ヤ)カの結び	メリ 終止ナリ	
	N③ゾ、コソ、ヤ、カの結び	ム、ラム ケム、マシ	
	N④ナム、コソ、カの結び		マジ
《係り結び》の外	N⑤終助詞的段階に位置する		ジ
	N⑥構文的条件による	連体ナリ	

今回の論は、助動詞の分類を意図しないが、個別論のための発展的な中間報告として、《係り結び》との交渉のありかたをタイプ別に整理しておくことは許されよう。

◆ 注記

N①―ベシは、すべての結びとなる。これは、その意味領域の広さと対応的であろう。

N②―メリと終止ナリは、同一レベルで視覚と聴覚の対立としてとらえられることが多いが、その妥当性は《係り結び》を通して、裏づけられるであろう。

N③―意味的、語源的観点からム系統としてくくられるム、ラム、ケム、マシだが、《係り結び》との関係においても、同様のふるまいを示す。

N④―マジはベシの《否定》と理解されているが、その《否定》の働きによって、ゾ、ヤの結びにならないという、ベシとの違いを示す。

N⑤―ジはマジよりも辞性が強いと理解されているが、《係り結び》の外にあることをもって了解される。《推量の助動詞》のもっとも外終助詞よりに位置すると理解されている。

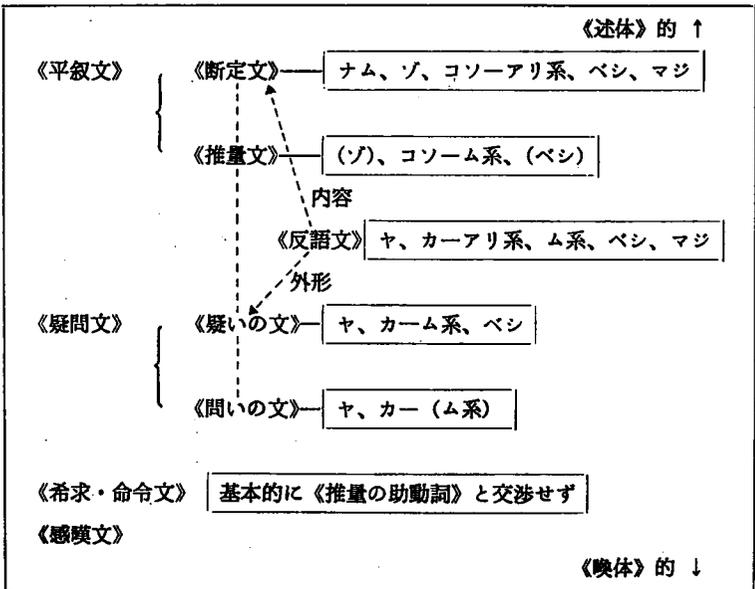
N⑥―連体ナリが《係り結び》の外にあるのは、承ける句自体が《係り結び》の外にあるという句の喚体性による。よって、意味的にも終止ナリとは次元を異にする。

五・二 文表現の類型

最後に、《係り結び》と《推量の助動詞》との相関によって描き出される文表現の類型について、今回検討した内容を整理しておく。

(図を参照のこと)

図 文表現と《推量の助動詞》



まず、《平叙文》について。先述のように、《断定文》と《推量文》に分かれる。前者は、ゾ、ナム、コソと内にアリを含む助動詞

《アリ系助動詞》と称す)との相関によって(典型的には、「ナムーアリ」<sup>(32)</sup>)によって、後者は、ソ、コソと内にムを含む助動詞(《ム系助動詞》と称す)との相関によって描き出される。

次に、《疑問文》について。《推量文》と連続的な《疑いの文》と、そこから《要求》の方向に向かう《問いの文》とに分かれるが、いずれも、ヤ、カと《ム系助動詞》によって描かれる<sup>(33)</sup>。

《平叙文》と《疑問文》との中間には《反語文》が存する。外形は《疑問文》、内容は《断定文》という両面性によって、不定的なヤ、カをとりながらも《アリ系助動詞》を結びにとる。また、その裏として《ム系助動詞》を用いても文の意味としての《断定》が表現されるのである。

### おわりに

今回は、最初に述べた二点の要請のうちの後者についての、またその限りについての論であった。しかし、助動詞が基本的に述体に属すものである以上、《平叙文》の意味的階層を分析化していくかたちをもつて、要請の前者の論に参画する可能性を持つであろう。そして、その論こそ、助動詞の意味組織を問うことの基底とされなければならぬ。

一九八八年九月五日、稿了。

### △注▽

- (1) 寺村秀夫(1984)参照。
- (2) たとえば、推量判断の根拠の有無を《示差的特徴》とした意味規定があるが、それ自体、たいして客観的根拠を持っていないのは皮肉である。
- (3) 北原保雄(1981)参照。

(4) 高山善行(1987)参照。従属節と《概言のモード》形式との関係について述べた。

(5) 大野晋(1984)(1985)参照。係助詞に重点が置かれているが、助動詞の意味に関する記述も示唆に富む。

(6) 北原保雄(1981) p.637の分類参照。

(7) たとえば、F. R. Palmer(1979)では、von Wrightの用語を用いて、"epistemic modality"《認識的法性》、"deontic modality"《義務的法性》、"dynamic modality"《動力的法性》の三種を基本的な法性と認めている。

(8) 『源氏物語』『枕草子』における《係り結び》の全用例(約五千例)の中から、《推量の助動詞》を結びにとる例をすべて抽出した。これを中心的な資料とする。なお、挙例は、日本古典文学全集本『源氏物語』(小学館)、日本古典文学大系本『枕草子』(岩波書店)による。また、周辺のな資料としては、平安初期の文学作品『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『土佐日記』『古今和歌集』、および『蜻蛉日記』の例は押さえてある。訓点資料については、築島裕氏、小林芳規氏の御報告を参照させていただいた。

(9) 小林芳規(1982)参照。

(10) 「全くくだ言なるゆゑに、歌によむ時は必ず下に「と」と受けたり」(『あゆひ抄』)

和歌では稀であるし、その使用は引用句中に限られる。ちなみに、八代集の和歌では、

「たもとより離れて玉を包まめやこれなむそれとうつせ見むかし」

(古今、四二五)の一例のみ。

マシについては、橋本進吉(1969)参照。

(11) 『源氏物語』には、ソの結びとなったケムは四例あるが、すべて、ケムカンである。その理由については不明。

(12) 《真のモード》と《疑似モード》の区別については、仁田義雄(1981)参照。

(13) 三矢重松『高等日本文法』に、『大鏡』(平松本)の例が指摘されている。「いみじかりける上手かな。あてたがはせたまへることや」はおはしま

すめる。(道長上)

この例も、「ヤハーメル」で「反語」をあらわしている。

(14) 『助動詞の研究』(白帝社)、第二節(四)「めりは疑問体に用られるか」参照。ただし、松尾氏は湖月抄本を引いており、例文では「いかにくめる」となっている。

(15) 『源氏物語大成』によって異文を示す。

河内本系 いかがおもふめる いかがおもふべかめる

(七菴源氏)

いかがいかがは いかがは(御物本)

別本 いかがいかがは(高松宮家本) (尾州家本) (大島本)

どの本文も、へまたはベジを含み、反語の意で理解しているようである。

(16) 「カーメルの例」

(中の君)「胸はいつともなくかくこそははべれ。昔の人もさこそはものしたまひしか。長かるまじき人のするわざとが、人も言ひはべるぬる。」(源氏、宿木)

この例は「疑問」の意でも「反語」の意でもとれない。保留しておく。

(17) 三巻本枕草子(二五五段)に次のような例がある。

前田家本、堺本ではナルの部分でナルで結論である。

(18) 中西字一(1986)によれば、ベジは様態的な意味(様相的推定)をあらわし、現代語の連用形接続ソウダにあたるものがあるという。とすれば、「明日は雨が降りそうですか?」にあたるベジの「疑問文」は成立しうる。

(19) 「推量」という表現は不確かながらことを承認する一つのあり方であるとも言えるし、また、それは承認ではなく、推量という別種の心的行為の表現であると言うこともできる。すなわち、この承認を決定と呼ぶならば、推量はあえる種の決定であるとも言えるし、既に決定の域をはみ出しているとも言えるであろう。と。高山善行(1986)では、

「質問表現」とのかかわりを通して、同じ趣旨の主張をおこなっている。

(20) (乙)の機能を積極的に認める立場をとるのが近藤泰弘(1986)である。おなじく、和歌に用いられない、ソや構文と比較しながら、

和歌でナムが用いられにくい理由を説明しようとする。従来、口頭語的ということで片づけられてきた説明に新しい見方を提示した好論であるが、はたして、ナムと「ソ」や「構文」とが等価であるのか、疑問が残る。一方、佐治圭三(1974)では、「もちかけ」の態度について、「む」は「弱い押しつけ」、「そ」は「強い押しつけ」、「こそ」は「強すぎる押しつけ」突きはなしの性格があり、ソ」のように、聞き手に向かってはたらくナムの力は「ソ、コソよりも弱いと理解する。

このように、対立的な見解が認められるが、今のところ、文法的に証明する手段を持ち合わせていないため、いずれとも決しがたい。しかし、前者の説では、ソ、コソには終止用法があるのにナムには終止用法がない、というところについての説明がほしいところである。

(21) cf. "The rhetorical question is interrogative in structure, but has the force of a strong assertion."

Quirk (1985) p. 825

(22) 荒木一雄他(1977)によれば、英語の rhetorical-questions で、普通、疑問文には生起しない 命令助動詞 (たゞえは、'musts maye) が生起する現象があるという。

(23) 断定・詠嘆説 (遠藤嘉基氏、塚原鉄雄氏など) 対伝聞・推定説 (松尾捨治郎氏、北原保雄氏など) の議論。

(24) ナリケリ構文 については、糸井浩造氏、秋本守英氏らの御研究がある。文の類型においては、状況陰題の文として位置づけられよう。

(25) 山田文法で言うところの 喚喚述法。

(26) 川端善明(1983)「現象文とか描写文とかの名で呼ばれているもの、文末にも文中にも係助詞をもたぬ平叙文を、やはり喚体の文としてこの類に一括することも妥当であろう。」

仁田義雄(1986)「現象描写文とは、演述型の一タイプであり、ある時空のもとに生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝えたものである。」

(27) 小松光三(1982)(1987)に「終止形十なり」が「確認」を二度重ねるという解釈があるが従えない。終止形句の担う判断(コトの承認)と、助動詞の担う判断(断定判断)とはあきらかに次元が異なる。それを、おなじく「確認」と呼ぶのはおかしい。むしろ終止形句自体が積極

的に「確認」をあらわさないことによつて、ムードの要素が自由に付着しうると見るべきであらう。

(28) ただし、ラムだけは例外であつて、へへへへ連体形「節」に生起する。「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」  
(古今、春下、八四)

この事実については、近藤泰弘(1986)で指摘されている。なお、この種の問題については、「詞の玉緒」の「かなの意にかよふらむ」の項など参照。また、右の和歌の解釈をめぐつての問題については、山口苑二(1988)が有益である。

(29) まとめると、次のようにならう。  
句の種類 助動詞 句中の主格表示 句中係助詞 文の種類

喚体的な連体句	ナリ	ノ、ガ頭在	生起せず	状況陰題文
述体的な終止句	ナリ	ノ、ガ頭在せず	生起	判断文

現代語では左の二文の違いに相当するであらう。

(ア)レハ藤田氏がしゃべっているノダ。(カ)きき↓連体ナリ相当  
藤田氏はしゃべっているラシイ。(カ)推定 ↓ 終止ナリ相当

(30) 川端善明(1983)「係助詞は助動詞の言語層を覆う」という指摘、仁田義雄(1984)「係結び現象は、判断のムードよりも外側、つまり伝達のムードに属するものである」という指摘は重要である。

(31) その多様さは二系列にわたる。一つは、epistemic, deontic, dy-namic の三つにわたる系列、もう一つは「様相的推定」へ論理的推定の区別としても注意されてきた、文の意味的階層における系列である。前者については、対照言語学的な視点の導入が俟たれる。後者については、高山善行(1987)でも言及した。双方の相関については個別論の重要課題とならう。

(32) ナムは、ケリ、ハベリなどアリを含むものを多く結びとする。厳密に言えば、助動詞内部に組み込まれたアリの「断定性」と打ち合っているのである。

(33) 「問いの文」に関して。ヤ、カにム系助動詞が加わると、「疑い」の色が濃い。現代語でも、「ダロウカは「疑い」の意が強く、「問い」としては「丁寧形のレデショウカを用いる場合が多いであらう。

【参考文献】

富士谷成章(1773)『あゆひ抄』  
松尾捨治郎(1961)『助動詞の研究』(白帝社)  
森重 敏(1951)「問投助詞から終止としての係助詞へ」『国語国文』昭二六・六  
(1958)「係結」(『続日本文法講座』1、文法各論編、明治書院)  
宮坂和江(1952)「係結の表現価値—物語文章論より見たる—」『国語と国文学』昭二七・二  
阪倉篤義(1953)「歌物語の文章—「なむ」の係り結びをめぐつて—」『国語国文』昭二八・六  
(1957)「反語について」『万葉』昭三二・一  
(1958)「上代の疑問表現から」『国語国文』昭三三・二(以下、後で「文章と表現」角川書店、に収められた)  
(1970)「閉じた表現から開いた表現へ—国語史のありかた試論—」『国語と国文学』昭四五・特集号  
川端善明(1983)「喚体と述体—係助詞と助動詞とその層」(『女子大國文』一五)  
北原保雄(1966)「終止なり」と「連体なり」—その分布と構造的意味—  
(『国語と国文学』昭四一・九)  
(1967)「なり」の構造的意味」(『国語学』六八)  
(1981)「日本語助動詞の研究」(大修館書店)  
佐治圭三(1966)「素材の世界と表現と—終止形接続のへなり—について—」(『国語国文』遠藤博士還暦記念号)  
(1974)「係り結びの側面—主題・叙述部に関連して—」(『国語国文』昭四九・四)  
橋本進吉(1969)「助詞・助動詞の研究」(岩波書店)  
中西宇一(1969)「へし」の意味・様相的推定と論理的推定—(『月刊文法』昭四四・一二)(以下、「論集日本語研究—助動詞—」有精堂、に収められた)  
田淵和子(1973)「源氏物語における係助詞『ぞ』と『こそ』について」(『高知女子大國文』九、昭四八・六)  
林田 明(1975)「係結」の言語生態論的研究—(千葉大『人文研究』4)  
伊牟田経久(1976)「ナムの係り結び」(佐伯梅友博士喜寿記念『国語学論

集』表現社)

(1981)「ソ・ナム・コンの差異—蜻蛉日記を中心に—」(馬淵和夫博士退官記念『国語学論集』)

神谷かさを(1977)『物語文章史と推量表現』(『国語と国文学』昭五二・一〇)

\*木一雄他(1977)『現代の英文法』助動詞(研究社)

宮地 裕(1979)『新版文論』(明治書院)

近藤泰弘(1979)『構文上より見た係助詞「なむ」「なむ」と「ぞーや」との比較』(『国語と国文学』昭五四・一二)

(1986)「結ぶ」の用言の構文的性格』(『日本語学』昭六一・一二)

F. R. Palmer(1979)『Modality and the English Modals』(Longman)

仁田義雄(1981)『可能性・蓋然性を表わす疑似モード』(『国語と国文学』昭五六・五)

(1984)『係結について』(研究資料日本文法5『助辞編』(一)助詞) 明治書院)

(1986)『現象描写文をめぐる』(『日本語学』昭六一・二)

尾上圭介(1982)『文の基本構成・史的展開』(講座『日本語学』2『文法史』) 明治書院)

(1986)『感嘆文と希求・命令文—喚体・述体概念の有効性—』(松村教授授古稀記念『国語研究論集』) 明治書院)

(1987)『日本語の構文』(『国文法講座』6『時代と文法—現代語』) 明治書院)

小林芳規(1982)『古代の文法Ⅱ』(講座『国語学』4『文法史』) 大修館書店)

小松光三(1982)『ななり』『なめり』『なりけり』の意味機能』(『愛媛国語研究』三二)

(1987)『古文解釈と助動詞』(『国文法講座』2『古典解釈と文法活用語』) 明治書院)

山口莞二(1983)『疑問表現の原理』(『国語国文』昭五八・三)

(1984)『疑問表現の否定』(『国語と国文学』昭五九・七)

(1988)『喚体性の文における疑念の含意—しづ心なく花のちるらむ』の基底—』(『国語国文』昭六三・二)

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(『くろしお出版』)

大野 晋(1984)『日本語の構文(Ⅰ)』(『文学』昭五九・一二)

(1985)『日本語の構文(2)(3)(4)(5)』(『文学』昭六〇・三・五・七・九)

R. Quirk(1985)『A Comprehensive Grammar of the English Language』(Longman)

山内洋一郎(1986)『助動詞「じ」の已然形』(『国文 研究と教育』昭六一・二)

森野 崇(1986 a)『係助詞「なむ」の伝達性』(『源氏物語』の用例から—) 明治書院)

(1986 b)『係助詞「なむ」の機能—そのとりたての性質と待遇性をめぐる—』(『国語学 研究と資料』一一)

築島 裕(1986)『平安時代の国語』(『国語学叢書』3『東京堂出版』)

高山善行(1986)『<推定表現>と<質問表現>の交渉』(『待兼山論叢』二〇)

(1987)『従属節におけるモード形式の実態について』(『日本語学』昭六一・二)

本稿は、昭和六十一年度大阪大学大学院文学研究科修士論文の一部に加筆、修正を加えたものである。懇切な御指導をいただいた、宮地裕先生、山口莞二先生、前田富祺先生、研究会の席上にて御教示をいただいた、大鹿薫久氏、近藤要司氏、森山卓郎氏、山内啓介氏、吉田光浩氏にお礼を申し上げたい。

また、『源氏物語』のソ、コン、ナムによる「係り結び」については、野本悦子氏(P.H.P.研究所勤務)から詳細なデータの提供を受けたことを明記し、御厚意に謝意を表す。

— 大阪大学文学部助手 —